

Vesalius, Andreas

Compendiosa totius anatomie delineatio, are exarata, per [Andreas Vesalius] & Thomam Geminum.

Londini, Ioanni Herfordie, 1545. 1vol. 40 plates (copper mono.). 38×29cm.
〈K491. 1-V〉 文献番号 9-1

ヴェサリウス『人体の構造について』

本書は、16世紀の医師アンドレアス・ヴェサリウス (Andreas Vesalius, 1514-1564) による木版挿図入り解剖学書概要である。初版『人体の構造について』(De humani corporis fabrica, 通称『ファブリカ』)は、1543年、当時の印刷文化の中心地であったバーゼルの出版業者ヨハネス・オポリヌスによって出版された。

著者ヴェサリウスは、中世を通じてヨーロッパ医学を支配した古代ローマのガレノスの医学伝統を革新し、近代医学の祖と謳われた人物である。1514年、ブリュッセルに生まれた彼は薬剤師を父としたが、高祖には神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン一世の妃マリ・ド・ブルゴーニュの侍医を務めていた者もいる医師の家系であった。このような幼少の環境に加えて、旺盛な好奇心をもつ無類の冒険好きであった彼は、昆虫や小動物の解剖をして遊んだと伝えられる。16歳でルーヴェン大学に入学し、自由学芸を学んだのちパリ大学医学部に入学。しかし当時、パドヴァやポローニャを中心とする北イタリアの大学医学部では、医学生自身が人体解剖を実施できるモンディノー方式の教育を旨としていたのに対し、パリでは、旧式のガレノス解剖学にもとづいていた。古代医学を集大成したクラウディウス・ガレノス(ベルガモン, 130年頃生)は、もっぱら豚などの動物解剖によって、碩学の文献を参照しながら人体構造を類推する方法をとっていた。そもそもキリスト教においても、人体解剖は不浄なるもの、罪悪とみなされていたのであった。ちなみに、モンディノー・デ・ルッツイ(1275年頃-1326, ポローニャ大学医学者)は、純粋な解剖学のための人体解剖を行い、中世唯一の解剖学手引書『解剖学』(1316年)を出版した先駆者である。

18歳でルーヴェン大学教授に就任したのちも、生体と生命のしくみを究明したいと熱望した彼は、数年後、神聖ローマ帝国軍に入隊し、軍隊とともに各地を移動しては、負傷兵を治療して臨床の経験を積む。この間おそらく、人体解剖も手がけたであろう。そして1537年、当時の医学の中心であり革新的気風に満ちていた念願のパドヴァ大学医学部に解剖医としての職を得る。この6年後、解剖学の金字塔『人体の構造について』は、ヴェネツィアで原稿や木版挿図、さらに見本刷りが整えられ、1543年バーゼルで出版されたのであった。

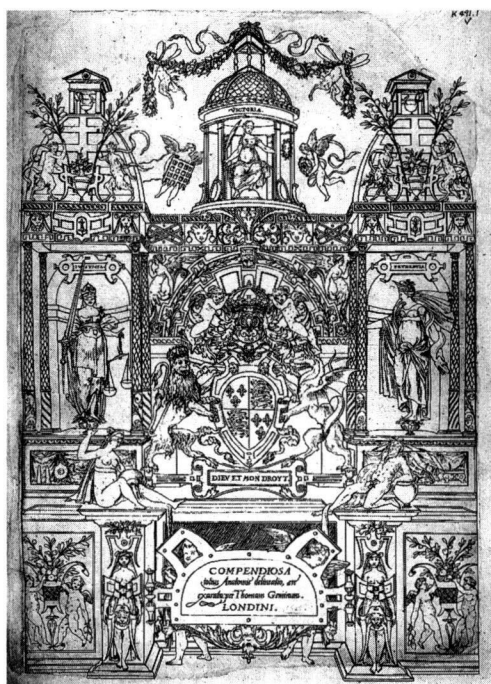
同書は、第1篇「骨学」、第2篇「筋肉」、第3篇「静脈と動脈」、第4篇「神経系」、第5篇「腹部内臓」、第6篇「肺と心臓を中心とする胸部内臓」、第7篇「脳と感覚器」、「索引」

からなる総頁数 800 を越える大著である。総じてモンディエーノの解剖法を革新する内容であり、腐りやすい部分から 4 日間で解剖する方法を改善し、骨格、筋肉、循環器、内臓器の各系を系統的に解剖する方法を唱えている。とくに人体機能の中心を肝臓におくガレノスの血液学説に疑いを投じ、のちのウィリアム・ハーヴィの血液循環説（1628 年）を導いた点で、まさに近代医学の幕開けを告げる書である。そこには、綿密周到な実験観察を基礎として、人体構造と運動のしくみを系統的に究明する科学的態度が一貫して認められる。

そしてこの著書の革新性は医学史にとどまらず、美術史上にも多大な影響を及ぼした。彼の系統的人体把握は、みごとな木版画によって視覚化されたのである。画家は、ヴェネツィアの巨匠ティツィアーノの弟子であったフランドル人ヤン・ステフェンスゾーン・ファン・カルカールと他のティツィアーノ周辺の画家たち、およびヴェサリウス自身とされる。骨格、筋肉、神経、動脈静脈などを図示したその挿図はすべて、しなやかで均斉がとれ、躍動し、生命感あふれる人体図であり、ルネッサンスの成果なくしてはありえない表現である。皮膚、筋肉、内臓、神経をしないで剥がされ、あらわにされてゆく人体は、「剥皮人体（エコルシェ）」と呼ばれ、彼らが生きているかのように、平穏な風景を背にして思い思いのポーズをとる光景は、医学的のみならず美的関心を喚起する。扉絵は、医師や観衆ら大勢の人、そして古代医学の象徴である猿、ガレノス動物の解剖への敬意をあらわす犬、骨学の重要性を物語る骸骨などさまざまな象徴に囲まれ、円形解剖学教室で誇らしげに解剖を行うヴェサリウスを描いている。彼のモットーは「敏捷に、愉快に、正確に」であった。

不動の名声を博したヴェサリウスは、カール五世、フェリペ二世の侍医として多忙な宮廷生活を送りながらも、初版に対する批判に答えながら改訂版の準備をつづけ、1555 年に約 60 増頁して出版した。初版以来 300 年余のあいだ版を重ねて世界各地で読まれ、江戸初期（17 世紀）に日本にも、もたらされた記録がある。（小池）

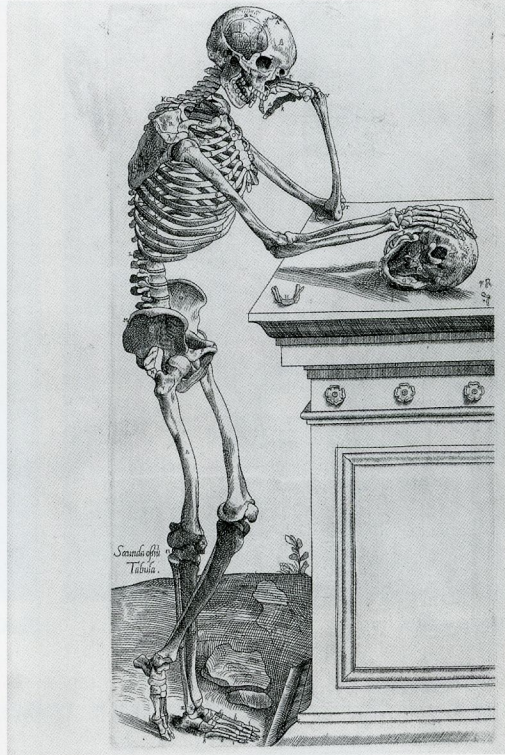
注）本書は初版以来多くの版本が出版されているが、本館所蔵本は本文 88p.、図版 40 枚のロンドン版である。



扉 絵

〈自然科学論〉

ヴェサリウス『人体の構造について』1545年
(文献番号9-1) 解題 p.8~9 参照



『絹の虫(蚕)』[159-]
扉絵
(文献番号7-20)

